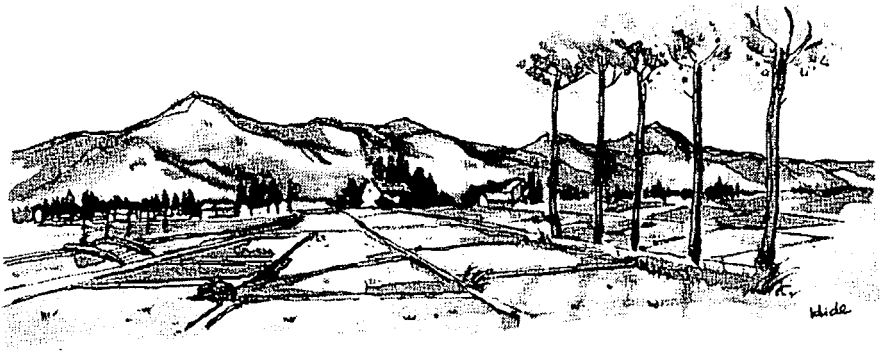


［自伝小説］

わが道を求めて

人間をはぐくんでくれるもの

長嶋　明
さしえ　竹内秀明

プロローグ

「わが道を求めて……人間をはぐくんでくれるもの」、この題をつけてくれたのは新潟県私教連の本間先生です。それは昨年の十一月九日でした。「私学のひろば……一九八五年のつどい」の記念講演のご依頼を受けて、頼まれれば断り切れぬ性分ゆえに、ついつい「じゃあ、私のおいたちでもお話してみましょう」ということになり、さて「表題は」と四苦八苦していたところ、さすが百戦練摩の本間先生、一発で決めてくださいました。

この日、新潟市公会堂に全県からお集まりになった皆さんを前に、臆面もなく「自伝」だか、「自分史」だかをお聞かせし、冷汗ものでした。こんな恥かしい思いはこれきれのつもりでいたのですが、またもや、それも今回は、わが県民教育研究所の機関誌の紙面を汚すことになりました。

その経緯はこうなんです。皆さんご存じの重沢修三こと八木三男先生の連載小説「少年の口笛」のあと、やっぱり誰か書いてみないか、ということになり、木村先生、若月先生が「どうです、会長」という口車に軽く乗せられて、そこはそれ、越後生まれは仕方のないもので、何となくその気になったのが三カ月前。この三カ月間の精神的ストレスは、胃潰瘍やポリープやら、三つも四つも出来ちゃった感じ。清水の舞台から跳び降りる思いで筆を執りはじめたしだいです。昔、尊徳翁夜話というのがありました。長崎翁夜話というには、まだ若過ぎるのですが、秋の夜長を六十じいさん豆噛むように、ポツリポツリと語りはじめることにいたしましょう。

とはいうものの、この自伝は、私自身まだ現役ですし、登場人物も実在の人が多いので、ノンフィクションだが、フィクションだか、いりまじったような、やはり「自伝小説」ということにしておきましょう。

また、私の独り語りでは気骨が折れますので、適当に対談形式にさせて貰います。対談の相手は我が県民教育研究所の誰彼ということにします。引き合いに出された方は、フィクションとお考えになって、お許し願います。

私のコトバ

○本誌編集長（若月）

先生の自伝風小説だか小説風自伝だか、みんな、楽しみにしています。

○本会副会長（八木）

大体ですね。本会の会長が機関誌にさっぱり投稿しないのはけしからん。本誌の理論的水準を高めるためにも、会長が、書評ていどのものでお茶を濁しているのはおかしい。

○若月

今、連載中の「少年の口笛」、なかなか評判が良いんです。でも、あれは少しページ数をとりすぎるという声もある。毎号刷り上がり四ページくらいでお願いできませんか。

お書きになるからには、まず原稿の締切り期日をお守り下さるよう、お願いします。もっとも、これまで先生は、誰かと違って約束を破ったことがないので、多分、間違いないでしょうが――。

○八木

その誰かっていうのは、おれのことではなかろうね。おれはちゃんと守ってるつもりだよ。

○若月

はい、はい。それは認めます。

○ナガサキ

それにしても、自伝なんていうのは、そう理論的水準を高めるのに、役立ちそうもないが――。まあ、寝転んで読む程度のものしか書けないよ。

○本会事務局長（木村）

先生は、あまり越後なまりがないけど、やっぱり新潟生まれなんですか。

○ナガサキ

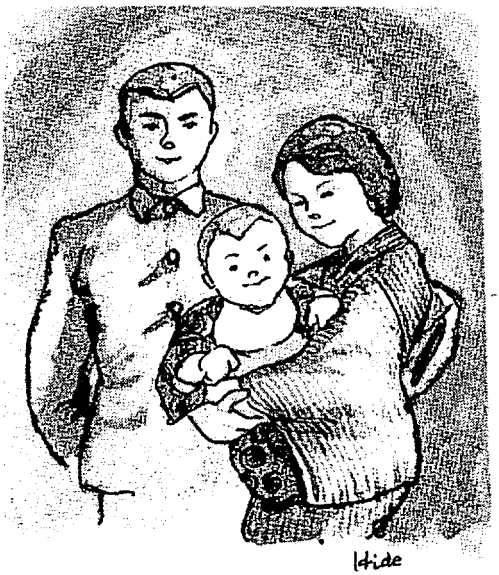
そうなんです。これでも、れっきとした越後生まれなんです。いまの中蒲原郡の村松町（昔の川東村、中川小学校宿舎）で、長崎武の長男、長崎家の七代目として呱呱（ここ）の声をあげました。時に一九二三年（大正一二年）の一〇月三一日でした。ところが、あとで詳しく話しますが、一九二五年五月、父の仕事の関係で台湾に連れて行かれ、以後一七年間、いわゆる幼少の頃を台湾で暮らしました。

台湾に限らず、当時、外地で暮らす家庭は、現地の人との関係もあって、いわゆる標準語、国語の教科書どおりの言葉を使わされたのです。家ん中のことですから、そんなに糞真面目に標準語をしゃべらなくても良いはずですが、おやじは、公学校といって、現地の人の子弟を教える学校の先生でしたので、ことさら厳しかったのだと思います。

母は農家の出なので、越後弁、といっても村松弁ですが、方言をなおすのに、随分苦労したようで、しょっちゅう父に注意されていたのを覚えています。

国語の教科書に出て来る言葉というのは、要するに、明治政府が日本の国を統一するために作り上げたものでしょうから、中央語、あるいは政府語ともいうべきでしょう。おかげで、私の家族、とりわけ私の兄弟達は、型にはまった標準語しかしゃべれなくなってしまいました。

私は、専門の調査のために、農村に出かけ、農家の皆さんとお話し合うことが多いのですが、地方語が話せないのは淋しいことです。



別に越後弁でなくても良いのです。東北だろうと、九州だろうと、どこの言葉でも良いから、思いっきりしゃべれたら、どんなに楽しいか、とさえ思います。

私にとって、方言は、英会話と同じくらい難物で、越後弁の片言さえも、いまだに話すことができません。

でも、この間、授業の時、学生の出欠をとっていて、「井村君」と呼んだら、「先生、私はイムラです」と叱られました。どうもエムラ君と発音していたらしい。イとエとが反対になる越後弁の特徴が、知らず知らずのうちに出ていたとしたら、おれもまんざらではない、なぞと、変な事にほくそえんだものです。

二〇年ほど前、岩手から新潟に引っ越して来た時のこと、新通小学校の一年生に入学した次男が、ある日、ぷんぷんにおこって帰って来て、「もう、学校に行くの嫌だ」とだだをこねはじめました。よく聞いてみると、小学校の受持の先生が、「あら、あんた、標準語、話せるのね」といったのだそうです。その先生にしてみると、岩手から越して来たというので、ひょっとしたら言葉が通じないかも知れないと、心配してくれていたのかも知れません。

私の子供たちまでが、自分の郷土（くに）の言葉を持たない人間に育っていたわけです。

戦後のことですが、台湾の人や朝鮮の人が、「われわれは、日本人に言葉を盗られた。姓名を盗られた。郷土も文化も盗られた」といっているのを聞き、それが植民地というものだったのか、と実感したものでした。そして、考えてみると、私の家族のよう

に、外地に送りこまれて、その植民地化の役割をになわされた人びともまた、個有の言葉も文化も失わされていた、といえそうです。でも、このことに気付いたのは、ずっと、ずっと、あとになってでした。

私の誕生

○木村

なるほどね、ところで、先生はおいくつですか。われわれと、あまり年代が違わないようにも見えるんだが――。

○ナガサキ

さっきもちょっと話したように、一九二三年一〇月三一日生まれですから、今年の誕生日で満六三才になります。ここの事務所の中では、最年長のわけですが、申訳ないが、どういうわけか、頭は白くもならないし、薄くもならない。何を食っているんだとか、よっぽど苦労が足りないんだろうとか、いわれますが、結局は体質なんでしょうか。でも、祖父もおやじも白髪ですし、私の弟二人はどちらもかなり薄くなっていて、どっちが兄か判らないくらいです。

一九二三年、大正一二年の九月一日は、ご承知のように関東大震災にやられた日でした。この関東大震災の騒ぎに紛れて、多くの社会運動家や朝鮮人が殺される事件が起こり、何となく世情騒然としていました。だから、私は、ひとに聞かれると、関東大震災にたまげて、母親のおなかからとび出したので、未熟児だったに違いない。少し気の短かいところもあるが、人一倍健康に気をつけてきたので、今日まで長生きできたのです。と答えることにしています。

私が生まれた前の日は一〇月三〇日で、これまた戦前に皆さん、ご承知の教育勅語の日でした。有難い教育勅語をケンケンフクヨウするために、元旦、紀元節、春季皇霊祭、天長節などの祝祭日と、この一〇月三〇日に、学校では、紫のふくさに包まれた勅語がとりだされ、ありがたげに奉読されたものでした。

当時は、父は二一才、母一九才、まるでままごとのような夫婦でした。父が勅語奉読の式を終えて、宿舎に帰宅した頃から陣痛がはじまったのだそうです。年若い父は産湯をわかすカマドを焚きながら、やがて生まれくる赤ん坊の名前を考えた。ふと見上げると、晩秋の空に明るい月が輝いていた。まんま

るな満月だったか、どうかは分からない。父は、とっさに、男の子だったら「明」、女の子だったら「明子」としようと、心秘かに決めたという。

大震災にたまげて飛び出したどころではなく、待てど暮らせど生まれてこない。とうとう日付が変わり、三一日未明、トリアゲばあさんもびっくりするくらい小さな赤ん坊が、オギャーとも泣かないで生まれた。産婆さんが逆さまにぶらさげて揺すったらやっと息をつきはじめた。見ると、あるかなきかのオチンチンがついていたので、ようやく「明」と命名されたしだいです。

私の姓名

○ナガサキ

私は、自分の姓名が大好きで、古いように思われるかも知れませんが、お先祖様からいただいた姓と、父からつけて貰った名を大切にしたいと思っています。

子供の頃から、ナガサキアキラをもじって、「菜が咲き、あきら」とか、「長先あきら」とよんだものです。菜の花が野原一面に咲き乱れて、明るい春を喜こぶ様子、あるいは、今は苦しくとも長い先には明るいことが待っているということ、と独り解釈して、雅号のように、ノートの裏表紙にサインしたりしたものでした。

父がその頃の世相をどう受け止めていたのか、父はまだ存命ですから聞くことも出来るのですが、わざわざ尋ねるのも何となくおっくうです。おっくうというか、気がとがめるといった感じでしょうか。

二〇才そこそこの若いカップルが（多分恋愛結婚だと思うが、それも聞きかねている）、これからの荒浪の中で、男の子を育てていく厳しさに負けまいとして、「明」とつけたのではなかろうか。そのあたりのところは、ききたくもあり、ききたくもなし、といった心境です。

○八木

先生の「ナガサキ」の「サキ」の字は、大のサキですか、立のサキですか。

○長崎

いや、よくぞ聞いて下さいました。さすが社会科の先生ですね。

私自身、それを疑問に思ったこと、一度もなかったのです。ナガサキアキラのナガサキは、ナガサキ県のナガサキと答えていたものです。ナガサキ県のサキは「大のサキ」、つまり「崎」ですよね。私はそれ以外にサキの字があることさえ、最近まで気が付かなかった。サイタマのサイは土へんの埼で、サキとは読まない。

大体、うちのおやじが、私の子供の頃から、崎の字を書かせてきたし、おやじ自身も崎以外に使ったのを見たことがない。これは今でもそうなんです。だから、子供の私が、サキに疑問を持つなんてこと、なかったんですね。

一九六九年三月、例の大学紛争の最中に、ひよんなことから学長代行にさせられちゃった。その直後、本部の庶務課長が、ちょうど、いま八木先生がおききになったように、大ですか、立ですか、とききにきた。卒業証書に、学長代行とはいえ、氏名を印刷しなければならない。さすが事務屋さんですね。

そこで、戸籍謄本をとりよせようということになって、はじめてつくづく見ると、「長崎」とあった。「立のサキ」ですね。

こんな字があったのか、と驚くと同時に、父をうらみましたね。だって、私はどういうわけか、子供の頃から無器用で　字が下手で、「自分の名前くらいちゃんと書けないのか」と、おやじに叱られ叱られ、やっと「崎」の字を練習したんです。そして、四十いくつになるまで、そうだと思い込んでいた。ある日突然そうじゃない、といわれても、そう簡単に身につくわけにいかない。

学長代行としての仕事に追いまくられていて、いつしか、そんなことも忘れてしまって、相変わらず「長崎明」と書いていたんですが、半年ほどたった

ある時、ふと私の家の標札を見て、またまたびっくり。真白なセトに、墨痕あざやかに「長崎明」と書いてあるではありませんか。

家の中に飛び込みざま、「おい、あれはどうしたんだ」。そしたら、うちの母さんは大笑いして、「あれは四年前、新潟に越してきた時から掛かっているんですよ。私が標札屋さんに頼んだら、どっちのサキですかと聞かれて、私たちの結婚の後、とりよせておいた戸籍抄本を見て、「崎」と書いて貰ったの。あなた、気が付かなかったんですか」には、参った、参った。

自分の家の標札なんて、めったに見るものではないにしても、自分の迂濶さに冷汗三斗の思いでした。これにこりて、以来「崎」と書くようになったかというと、さにあらず、大正生まれのねちっこさは、これくらいのことではくじけない。

○木村

でも、最近は「長崎」と書いておられるようですが……。何か、きっかけが……。

○長崎

そうなんです。ここ二年くらい前からなんです。それまで、農学部の庶務で使っていたゴム版は「長崎明」となっていたのですが、庶務係長が替わって、とても几帳面な人で、崎か崎かということで、戸籍抄本を取らせられて、事後、学部のゴム版は、庶務であれ、会計であれ、みんな「長崎明」に交換され、庶務保管の個人調書も、あらゆる公文書も、「立のサキ」に統一されてしまった。ひとの名前を勝手にいじくりやがって、と力んでみても、もともと、その方が本物なんだから、どうにもしようがない。公には「長崎明」になったのに、ご本人が「長崎明」でがんばっているのも変ちくりんなので、一念発起して、自分も戸籍どおりに書くことにした。還暦過ぎてからのことでした。

それだのに、ナガサキ家では、おやじも、おやじの兄弟も、私の兄弟も、子供も、孫までも、相変わらず「大のサキ」で通している。「長崎明」ではなくて、「長崎明」と結婚した筈の妻までが、「長崎」を書いている。どういう神経だろうか。よし、こうなったら、意地でも「立のサキ」でがんばろう。それが大正魂の見せどころなんて、きばっているこの頃です。

（ながさきあきら＝にいがた県民教育研究所会長＝新潟大学農学部教授）

（続）